

刊本下學集について

龜田 次郎

一
足利時代から徳川の世を経て明治時代までも、一般通俗用の辭書の代表として、「下學集」、「和玉篇」「節用集」の三書がある。「下學集」は分類體で、「和玉篇」は字形引で、「節用集」は假名引である。此三書の中で、「下學集」は、その先驅をなしたものである。今、自分は、此「下學集」の刊本について聊卑見を述べる。遺漏粗略もあらうが、それは世の同好者の補正を俟つのである。若し、幸に、多少斯學に參考ともならば、吾望は足るのである。

二

「下學集」の事は、世に周知のものであるから、其體裁、組織や、内容については、一々述べないが、其出來たのは文安元年東麓破納の序があるから此頃の作であらう。この破納を「國語學書目解題」には「京都の禪僧と見ゆれど其名を知らず」とあり、古本節用集の研究には「多分東山建仁寺の僧だらう」とある。又其書名も部門も、序文に、

刊本下學集について(龜田)

「乃造字書以授之日曰下學集也下學者語曰下學而上達云爾思之夫下學地理而上達天道豈不在斯書乎故卷則上下象天地兩儀門則十八取九天九地之二九矣」とあるのでわかるのである。而して此分類體の「下學集」は、同じ通俗辭書の假名引體の「節用集」にも引用せられてゐるので、其魁をなしたものである事がわかるし、又支那明の世、鄭舜功の著「日本一鑑」第五卷寄語の處にも、「節用集」と共に見えてゐるから、海外にまで影響を與へた事が知られるのである。(古本節用集の研究及日本一鑑解題(藝文五卷九號所載參看))。兎にも角にも足利時代に出來た三種の通俗辭書の中で、最初のものである事は、注意すべきものである。

三

此足利時代に最初に出來た通俗辭書「下學集」は、文安以後、傳寫して世に廣まつてゐたのである。今日世に存してゐる古寫本は、自分の知つてゐる所では、「明應八年己未九月十一日山城國相樂郡於當尾中殿書寫之右筆五十七□□□□」(此六字墨にて塗抹)の奥書あるのが、最古のものである。此は「弘文莊待賈古書目」第一號(昭和八年六月一日刊)所載である。文安元年より五十六年後のものである。尙これより以前のものであるかも知れないが、現在では、此明應八年本より古いのは知らないのである。後「大永二稔壬暮春廿八日寫焉了」の奥書あるものを、徳川時代の「萬治四丑年二月に大谷派本願寺の最初の講師になつた惠空師が十七歳の時の影寫本がある。此は大谷大學所藏である。又「天文第拾年辛丑神無月上旬書寫畢□□(此處墨にて塗抹)」の奥書あるものがある。東林莊文庫所藏である。其他帝國圖書館に榊原芳野翁の納めたものが三種、圖書館に一種、東大國語研究室に一種(大正十二年震災にて焼失)、京大國文研究室に三種(一種は徳川末期のもので増補本である)、身延山文庫に二種(書誌學所載)、家藏本一種、淺倉屋書目所載の一種、

〔書誌學第一卷〕
〔第五卷所載〕

等がある。以上は、何れも皆足利末期のもので、其内容も、刊本とは大分差違がある様である。加之、内閣文庫に、慶長年間禪深春良の註を加へた「下學集精抄」や、靜嘉堂文庫に、狩谷掖齋の加註したものや、「國語學書目解題」に見える「下學集類字」の類もある。自分の知り得た所は此文である。尙各所に古鈔本は存在するであらう。然し、此等の寫本については、今は本篇の主眼とする所で無いから、更に調査を遂げ、他日機を見て、詳述する事にした。只茲には現在知り得た所を記述するに止めて、此等諸鈔本が、世上流布の各刊本と、内容に大分差違の存する事丈を注意して置くのである。

四

「下學集」の刊本については、已に「國語學書目解題」にも見えてゐるし、近くは、岡井慎吾氏の「日本漢字學史」にも述べてあるが、此兩書には、遺漏や誤謬の所があるから、今、自分は、聊、所見を述べて、此一篇を草したのである。尤も、此自分の記述にも、粗雑不備な點もあらうが、只、卑見が既出のものより、少し詳細なといふにある。後出のものが、既出のものより一步進むのは、素より其所である。只、此後出の私見が、多少斯學に參考ともなり、研究者に資する所もあらうかとおもふのである。他に何等の所思は持たぬ。自分は素より前掲既出二書の所載に對しては、敬意を表する者である。讀者も、亦、これを諒承せられたい。今、以下順次各種の刊本について述べよう。

甲、普通本

A 元和本及其異版

「下學集」の初刊は、徳川時代の元和三年である。同じ通俗辭書の「節用集」が、天正十八年に堺版が刊行され、

刊本下學集について(龜田)

「和玉篇」が、慶長二年に易林本が出版されたのよりも、後年の事に属する。此初刊本は、美濃紙本上下二冊で、各卷の丁数は別々に記してあるが、上卷は三十一丁で、内、序文三丁、目錄壹丁、本文二十七丁、下卷は、四十九丁で、内、目錄一丁本文四十八丁である。毎頁七行、柱に下學之上(下)とあるが、間々、下覺となつてゐる所がある。下卷最末一行に、「元和三年乙巳孟夏吉日梓焉」とある。此元和初刊本の底本は、何に依據して出版されたか未詳である。在來の古鈔本で、自分の見た何れにも一致しないので、断定出來無いのは、遺憾である。何か底本がある筈であるとおもふ。然るに此初刊本に二種の異版がある。共に本文、内容には何等變りは無いが、一は、此最末の一行を少し前行に進め次行に行書で、更に、杉田良庵玄與開板」と加へたのと、一は此刊行年月も、開板元も全く削去したのとである。共に少し後年の後刷本である。即ち元和本には、

- 元 和 本
- 1、刊行年月のみあるもの(初刷)
 - 2、刊行年月に出版元を附刻せるもの(再刷)
 - 3、刊記を全く削去せるもの(三刷)

の三種があるのである。

B 寛 永 本

此元和本に次いで、寛永二十年刊本が出來たのである。美濃紙本上下二冊で、題簽は行書で下學集上(下)とある柱には下學上(下)と記し、上卷、二十七丁、内、序文二丁半、目錄半丁、合計三丁、本文二十四丁で、下卷、四十三丁、内、目錄一丁、本文四十二丁である。毎頁八行、下卷最末の一行に、「寛永貳拾未歲孟夏吉日」とある丈で、出版

元は記して無い。此寛永二十年本は、前記元和本の行數を増して刊行したもので、本文内容には、何等の差異が無い様である。蓋し世の需用の爲に出版されたものである。此寛永本には異版は無い。只此一種のみである。

C 明曆本及其異版

此寛永本に次いで刊行されたのが、世に明曆版といはれてゐるものである。自分の調査した處では、此種の刊本には、刊行年月が見え無いのであるが、去、明治三十八年四月二、三兩日開催の大槻文庫の藏書中から、慶長から元禄まで五百種を選択して展觀された「第五淺草文庫書目」に、明曆版として前河茂左衛門刊行の「下學集」一冊が陳列されてゐたし、又近く書誌學第一卷第五號（昭和八年九月刊）巻頭掲載の「淺倉屋書目」中に、「下學集明曆三年板一冊」が見えてゐるから、刊行年月の明記された明曆三年版がある様である。自分は未見であるが、姑く此兩書の記事に依て明曆三年刊本とする。

此明曆刊本は大槻文庫本や、「淺倉屋書目」所載の明曆三年版（未見）の外に、美濃紙本上下二冊で、題簽は楷書で、新下學集上（下）もあり、刊行年月は記して無いが、下卷體字門の最末下部に、前河茂右衛門梓行とあるのがある。上卷は序文二丁、目錄一丁、本文二十丁、合計二十三丁。下卷は、目錄一丁、本文三十六丁、合計三十七丁である。毎頁九行柱には下學上（下）とある。本文内容は、上記元和寛永諸本と何等差違は無いが、只行數の多い丈が異つてゐる。此も後世、需用に應じて出版されたのである。此明曆本には、上記二種の外に、尙、異版が存する。一は、刊行年月も出版元も、全く削去したもの、後刷本である。只此種では其後刷の際板式の毀損した箇所を少しく改刻した様である。それは下卷最終の下學集第ニとある所に、「ヌ」の片假名一字を細書して加へてゐる様なのが其一例である。一は

刊行年月は見え無いが、出版元前河茂右衛門が、在來の刊本では、下卷疊字門最末に記してあるのを削去して、同じ下卷の最終行の下部に「吉野屋權兵衛」と二重框にして押込印刷してあるのと、題簽が行書で「新下學集上(下)」とあるのが異つてゐる。尤も上記下卷最終の「下學集畢」の「ヌ」の片假名細書は、此種には無いのである。此二種は共に何れも後刷本である。即ち明曆本には、

明曆本

- 1、明曆三年版(未見)
- 2、刊行年月無く出版元前河茂右衛門のみあるもの
- 3、刊行年月も出版元も無きもの
- 4、刊行年月無く出版元吉野屋權兵衛のみあるもの

の四種があるのである。

茲に特に注意しておくべき事がある。それは此明曆各本に於て、序文第三行二字目の爰有の爰の字を、何れも皆安に誤つてゐる點である。此點が、此種刊本の特異の處である。岡井慎吾氏は、其著「日本漢字學史」に於て、此誤謬の點を以て、他の刊本の板を購つて、別に摺つたのかとして、

國語學書日解題には元和三年(二二七)四月と寛永二十年(二三〇)四月との兩刊を記して居られるが其中だらう

といつて居られるが、元和、寛永各刊本共に、此の誤謬は無い。況んや其板式は全く別板であつて、此明曆版とは行數や形式が異つてゐるに於てをやである。明曆版は全然別版である。序にこれを述べておく。

D 寛文本及其異版

明暦版に次いで現はれたのが、寛文版である。美濃紙本一冊で、上中下三巻に分ち、題簽に「新板下學集全」と行書で記してある。上巻は、序文三丁、總目錄一丁、本文は天地門から支體門まで二十三丁で、中巻は、惣藝門から器財門まで二十四丁、下巻は草木門から疊字門まで二十丁と點畫少異字三丁合計二十三丁である。これが一冊に合刊されてゐる。柱には下學上(中、下)とあつて、各卷丁数が別になつてゐる。序文と總目錄とは、毎頁八行で、本文は各卷共九行である。裏表紙の見返に、「寛文十三丑年仲春 福森兵左衛門板行」と行書で二行に記してある。内容は從來の各刊本と差違は無い。此寛文本にも、亦、異版がある。矢張美濃紙本一冊であるが、刊行年月は見えないで、只、其出版元の名丈が黒地に白字で、福森兵左衛門板行と框にして卷末下部に挿込んで印刷してあるのが異つてゐるに過ぎぬ。此他には何等の差異が無い。後刷本である。それで、此寛文十三年本には、

寛 文 本

- 1、刊行年月及出版元あるもの(初刷)
- 2、出版元のみ入木したるもの(後刷)

の二種があるのである。

尚以上列舉した各刊本の外に、中本形の「下學集」があるとの事である。無論、徳川時代の刊行である。これは佐々木竹苞樓書店から、某藏書家へ賣却したとの話である。自分は全く未見に屬するから、刊行年代其他の事は不明であるが、「寛文書籍目錄」字書の部に「下學集半切」二冊とあるから、或は此書では無いかと考へる。若しこれならば寛文以前の刊行であるのは確かである。然すれば、此書は上記明暦版前後の刊行である様である。他日の獲得を期待する。茲には、只、これより記るす外に仕方が無い。今後の探究に譲る。

自分の知り得た普通の刊本は、上述の通である。尙、遺漏、脱落があるかも知れないが、現今の調書では、以上に止まるのである。

乙 増補本

普通本の刊行諸本は、前掲の如くであるが、時代を経るにつれて、増補本の出現あるは當然である。従うて此増補本の刊行を見るに至つたのである。

A、寛文六年本及其異版

増補本の最初は、寛文六年刊行の「眞草下學集」二冊である。美濃紙本上下二冊で、各卷目錄の處には「眞草二行新板考訂下學集兩かな付」と行書で記してある。上卷は、序文二丁、目錄本文共二十六丁、下卷は目錄本文共、四十五丁である。柱には下學上(下)とある。最初の序文と最後の點畫少異字とは、楷書で、毎頁九行であるが、目錄や本文は其に行書であつて、殊に、本文は、草字を眞字の右に列らねて、其右側の草字に、音を附し其左側の眞字に訓を附してゐる。毎頁六行、縦罫である。普通刊本と異なる處は、草字を加へたのと、眞字に訓讀を附したとである。最後に次の様な跋文がある。即ち「

語曰一字難易千金矣苟乎哉斯言也了角意童識其字利而愛無所需於屬字之書故東麓破納爲之輯錄於雙快號以下學集觀其爲書事々物々無不盡焉烏軍非強者之許也乎雖爾黨書生多則困倦于眞字之信屈廢牙故如今字傍附於草字並和訓而校以於舊文之紙繆是亦升高之一助乎
寛文六年庚兆敦祥葵寅上浣

とある。これで本書の内容の事がわかるのである。此書にも、亦、異版がある。それは、元禄八年の後刷本である。此異版後刷本は、表題は「眞卿二行新板考訂下學集」とし、最後の跋文を全く削去し、只、奥書に「元禄八乙亥年九月日 善兵衛」と記したものである。他の處は、初版の寛文六年本と何等の差異が無い。岡井慎吾氏の「日本漢字學史」に「眞卿二行新板考訂下學集元禄」と記し、此寛文六年本と別種の増補本の様にいはれたのは誤である。即ち、寛文六年本は、

寛文六年本

- 1、跋文あるもの(野田本、初刷)
- 2、跋文を削去したもの(元禄八年善兵衛本、後刷)

の二種があるのである。

B、寛文九年本及其異版

越えて三年後の寛文九年に、別種の増補本が刊行された。「増補下學集」である。美濃紙本五冊で、上卷二冊、下卷三冊に分つてある。上卷一は、序文四丁、目錄二丁、本文四十五丁、同二は、五十八丁で、下卷一は、五十八丁、同二は、三十一丁、同三は、三十六丁である。柱には増補下學上一(下二)の如く記してある。只上之二、下之三、の二冊には、之の字が這入つてゐる。序文と目錄とは、毎頁七行であるが、本文は何れも皆八行になつてゐる。本文、各門最初の部分は、普通本と何等差異はないが最後に「増補」として、多數の語詞を増加し、詳細な註釋を添へてゐるのが特長である。卷末下部に

飯田忠兵衛 開板 寛文九歲
長尾平兵衛 六月吉旦

と四行に記されてゐる。又卷頭には、次の如く増補者の序文がある。即ち

増補下學集叙

卞和之璞不_レ磨_レ不_レ美_ナ將_カ之劍不_レ治_レ不_レ銳也_ナ學亦然不_レ學不_レ成才矣_ナ三教之道雖_ニ其誨_ニ人異_ニ又皆在_ニ發_ニ良心_ニ求_ニ放心_ニ耳有_ニ一書_ニ生_ニ憂_ニ下學集不_レ詳審_ニ拾撫_ニ溫_ニ而撰_ニ増補下學集_ニ童蒙_ニ依_ニ此_ニ下學而上達_ニ法_ニ仲尼_ニ之微言_ニ豈不_レ免_ニ醉生夢死_ニ之病_ニ乎_ナ

寛文歲次己酉_ニ癸卯_ニ月穀日_ニ

山脇道圓重顯題

である。殊に、本書で注意を惹くのは、塾字門の附録の様にして、「國華合集貞元進士花艷谷選」といふものを添附してゐる事である。此抄録は、永祿二年の古鈔本以下の「節用集」にも夫々見えてゐるし、文寛永頃の刊行とおもはれる「國花集」にも收録してあるから、餘程以前から引用されてゐて世間に行はれたものらしいが、然し自分には、聊、疑問におもはれる書物である。此寛文九年の増補本にも、異版がある。それは、内容其他には別に異つた點はないが、只、巻末の出版元の飯田忠兵衛の名を削つて、長尾平兵衛丈の開板とし、刊行年月も元の儘で出版してゐるのである。これは言ふ迄も無く、後刷本なる事は明かである。世上流布本には此後刷本が多い様である。即ち

寛文九年本

- 1、飯田忠兵衛長尾平兵衛兩人刊行のもの(初刷)
- 2、長尾平兵衛丈の刊行のもの(後刷)

の二種があるのである。

C、貞享五年本及其異版

次に出た増補本は、貞享五年刊行の「平假名註下學集」である。題簽には「_{平假名}註_{名註}下學_{入上}入上(中、下)」となつてゐる。岡井慎吾氏の「日本漢字學史」に「_{平假名}入_入下學集貞享三年(二三四六)」とあるのは、本書の事で、刊行年月を誤ら

れた様である。美濃紙本三冊である。全部七十五丁、其上巻は通計三十丁で、内序文三丁、目録一丁、本文二十六丁で、中巻は三十一丁から四十九丁まで、内、目録一丁、本文十八丁で、下巻は五十丁から七十五丁まで、内、目録一丁本文二十五丁である。柱には、只、下學とあるのみである。序文は、楷書、平假名附で、毎頁八行、目録は各巻共、行書平假名附で、各門の下に、平假名で註解がある。毎頁六行、本文は行書で記して、各語の註は、平假名交り文である。「増註」と黒地に白字で見出をつけて増補した所がある。毎頁九行で、處々に半而大の挿圖を以て説明してある。餘程通俗化してゐる。時を經るまゝに、時好に投する様にしたもの、様である。殊に、挿圖入が面白い。最後に下文の跋があ。

無用之辨不^ハ急^ニ之^ヲ蔡^ハ君子^ノ之所^ニ干^ニ惡^ム勉^ム乎^ニ勉^ム乎^ニ有^ニ俄^ニ頃^ニ閑^ニ度^ニ則^ニ暴^ニ棄^ニ之^ヲ病^ニ益^ニ盛^ニ焉^ニ予^ハ自^ニ卯^ニ角^ニ之^ヲ變^ニ此^ノ書^ノ之^ヲ事^々物^々醜^ニ不^ニ探^ニ摺^ニ而^ニ載^ニ然^レ硏^ニ愚^ノ之^ヲ兒^ノ女^ノ或^ハ愛^ニ其^ノ眞^ニ字^ニ信^ニ屈^ニ註^ニ釋^ニ之^ヲ難^ニ勉^ニ勵^ニ故^ニ如^ニ今^ニ柔^ニ於^ニ草^ニ字^ニ刈^ニ繁^ニ補^ニ不^ニ足^ニ且^ニ爲^ニ孩^ニ兒^ノ之^ヲ止^ニ啼^ニ自^ニ畫^ニ其^ノ圖^ニ而^ニ示^ニ其^ノ趣^ニ是^ニ亦^ニ升^ニ高^ニ之^ヲ梯^ニ乎^カ

肯貞享五暮 著雅
執除 中村甚廼旧貞讀跋

林鐘下澣 二條通板行

とある。これで著書や刊行年代等が明かるのである。此貞享五年本にも、亦、異版がある。それは上下二冊になつてゐて、上巻一冊、下巻に中下合冊され、本文内容には毫も變りはないが、原刊本の平假名註下學集序とあるのを、下學集序と變へたり、二冊に合刊したので新に下學繪抄目錄上(下)としたのを添附して重複させたり、原刊本の巻之中とあるのを、亦、巻之下として原刊本の巻之下の分の文字を削去して一冊の如くしたり、又斯く二冊に合刊したので丁數を新に附け換へたが、其爲、丁數が重複したり、本文と目録とか錯誤した所などがある。加之巻末の跋文の年月

を一行丈削去して「林鐘下潛」以下の一行丈を存してゐる様な不體裁を現はしてゐる。一見して後刷本である事が知られる。斯る類例は、徳川時代のものに澤山ある。それで、此貞享五年本も、

貞享五年本

- 1、刊行年月のあるもの（原刷）
- 2、刊行年月を削去して合冊したもの（後刷）

の二種がある。

D、正徳四年本

次いで出た増補本は、正徳四年本である。題簽には、「和漢新撰下學集全」と楷書であるが、内題には「和漢新撰下學集」とある。岡井慎吾氏の「日本漢字學史」に「和漢新撰下學集假名註 正徳」と見えてゐるのは、此書であらう。美濃紙半切本五冊合巻になつてゐる。卷一は、三十三丁、内、序文二丁、目錄一丁、本文三十丁で、卷二は、二十四丁、内、目錄一丁、本文二十三丁で、卷三は五十四丁、内、目錄一丁、本文五十三丁であるが、丁數に六丁錯誤があるから實際は四十九丁である。卷四は、二十九丁、内、目錄一丁、本文二十八丁で、卷五は二十七丁、内、目錄一丁、本文二十六丁である。柱には卷之一（二、三、四、五、）とある。序文、目錄は每頁六行であるが、本文は大字の處は、每頁五行、細字の處は每頁八行若くば九行で、不同である。本文は、片假名交り文で記してあつて、處々に、挿圖を入れて説明してある。書名の示す如く、和漢諸方面の事項に亘つて記述して、當時の三世相といふ通俗百科全書の様になつてゐる。これは全く世の進運に伴ひ需用の要求に依つて斯く廣汎に涉り、愈、益、通俗化したものである。今各巻の目錄を示さば、下の通りである。

卷一

天文門 地理門 宮屋門 時候門 人倫門 身體門 氣形門 生植門

卷二

衣服門 飲食門 器財門 彩色門 數批門

卷三

態藝門 禮記門 切韻門 詩賦門

卷四

音律門 詠歌門 神仙門

卷五

醫療門 釋道門 雜用門

と二十三門に分類して、普通本の分類十八門より、五門増加して、名稱も大分變改してゐる。本書卷末に、「正德四甲午年正月吉日 京師書鋪 加賀屋卯兵衛梓」とある。又卷頭に、著者の序文がある。それは、

和漢新撰下學集序

夫類不以不學則不上達信哉好仁不好學其蔽愚好勇不好學其蔽亂也何遂不日不學之乎和氏玉璫稱夜光玉焉假於不聚瑩加切礪琢磨之則須登道岸李白感鐵杵學已大成而其名于今照照此學成因記憶耶且又依才敏耶只有好之厚習之熟故學有求勝彼所謂人一能之己百之十能之己千之是勇之事也寔人求故器求新進任善言也大凡世人問難而臨事煩者亦不少余惛然此人愛惑因茲平日授師張要文字撮十一於千百中又儼諸家活套間加已意集盈軸名曰和漢新下學集總以三俗語伸之欲教嬰童便濡觴之學耳豈爲高明哉始似用管窺天川針刺地又恐藏世界于粟貯乾坤于一壺梗槩乎庶幾有小補幸甚也見者必以言不可害志又泥此篇勿守株愚本望也最有道備胡蘆而已猶待

刊本下學集について(續川)

同志知音「改正之又予幸也」

正徳四甲午年孟陽吉旦

洛城下伊藤宣謙謹書方寸之地

とある。此序文で、内容の一斑が推測出来るのである。

以上列舉した諸本が、今日迄、自分の知り得た増補本の刊本である。尙此他に前掲の慶長年間に出来た禪深春良加註の「下學繪抄」や、狩谷掖齋加註本や「下學集類字」の類があるが、此等は皆寫本であつて、刊本でないから別述べない。

斯くの如く、「下學集」は、其普通本が元和三年に創刊されてから、後年、其増補本が寛文年間にまた初めて刊行され、普通増補の兩種の刊行は、以上自分の調査した所では、普通本が「寛文書籍目錄所載」の未見半切二冊本を加へて、五類十一種、増補本が四類七種あるのである。今、此等各種刊本の出現の跡を考へて見ると、同じ通俗辭書の「和玉篇」や「節用集」の刊行と、其徑路を一にして居る様である。「下學集」創刊の年代は、多少遅れて元和三年であるが、この普通本が寛永以後續刊され、増補本が寛文以後刊行されたのは、他の通俗辭書「和玉篇」や「節用集」に、寛永以後、續々諸版の刊行があり、寛文以後に、増補本が出版されたのと、能く符合してゐるのである。此事實は、通俗辭書の三代表が併行した事を示すものである。然るに、「和玉篇」は、後に至つて、前代足利の世から行はれてゐた「大廣益會玉篇」が慶長九年に刊行され、延いて寛永や慶安の版本から音訓を假名附にしたものが續刊され、之に加ふるに、支那清の「康熙字典」が享保年間、新に渡來し、後には、之に音訓を假名附にしたものが刊行され、此

新しい字典が、大に世に持囃される様になつた。此等の事情からして、在來の「和玉篇」に、増補改正を加ふる事となつたが、遂には、漸次、在來の「和玉篇」は、其流行の力を失つて、「會玉篇」や「康熙字典」に壓倒されて仕舞つたのである。従うて在來の「和玉篇」は次第に行はれぬ様になり、果ては其影を失ふに至つたのである。又「下學集」も、通俗辭書の魁をしたものではあつたが、元來分類體である。異名とか類義語とか意義上連關した語詞を同時に知るには便利であるが、「節用集」が假名引である上に、分類體を併用してあるから、其非常に檢索に便利であるのは、到底匹敵する事が出来ない。即ち「下學集」が、類に依つて分つたに反して、「節用集」は、假名引と分類體とを兼ね併せてゐる長所があるため、遂に、「下學集」は「節用集」に壓倒されて仕舞つて、其影を潜める様になつたのである。「節用集」は大に捷覽の便があつた上に、後世愈、益、其内容に増補訂正を加へ、挿圖を入れたり、社會凡百の事項を記載したりして、恰も通俗百科辭彙の觀を呈し、獨、其勢力を専らにして明治時代に及び、泰西辭書に倣つた國語辭書が現はれる迄、其威を擅にしたのである。然し「下學集」は、斯る事情の下で、其影を留めぬ様になつたとはいへ、足利以後の辭書、殊に其通俗的のもの、註釋には、其範を垂れたもので、これが明治時代までも及んだことは注意すべきである。加之、また其收載の語彙は、當時の國語資料として貴重すべきものであることは、忘れてはならぬ。

終にいつておく事がある。それは、此「下學集」の書名は、其序文にも見えてゐる如く、「論語」の「下學而上達」の語から出たものであるが、之に倣つて「節用集」の書名の出典も、矢張「論語」學而篇の「子曰道千乘之國敬事而信節用而愛人使民以時」からだとする説が出来た事である。此説の出所は、尾崎雅嘉の「群書一覽」に見えたのを其

最初とする者があるが、自分の管見では、寛文十年正月本の「頭書増補二行節用集」に見えたのを嚆矢とする。「群書一覽」の記載は、此に依據したものと信ずる。此寛文十年本の記事は、尙延寶以後の同種の者に續々記るされてゐるのである。自分は、此出典の記事は、後世「下學集」序文の語から思ひ付いて唱へ出したものであらうと考へる。序に茲に聊、卓見を附記して參考に供へる。

五

以上叙述した所で、「下學集」各種刊本の事は、わかつたとおもふ。此「下學集」は、今日では、實用的に見て、辭書として何等重をなす所が無いであらうが、其成立當時は、素よりであるが、後世でも、續出した各種辭書の編纂上其組織、體裁等に偉大なる影響を與へたのである。殊に門目や其名稱には、全く範を垂れたのである。明治時代に泰西辭書の渡來する迄は、辭書編纂には、必參照に供へたものである。就中、徳川時代に盛行して、明治時代迄も、獨其勢力を專有した通俗辭書の「節用集」には、此事實の非常な跡を認め得るのである。加之、其收録の語彙は、僅少であるとはいへ、國語資料として學者の研鑽に資する所が多である。「下學集」は、實に我辭書史に於て看過すべからざる産物である。自分が業餘に、蒐集見聞した所に依つて其所見を、昨秋大阪靜安學社で述べたが、今亦、知友の勧めに依て、此一篇を草して茲に公にする。蕪雜の文字斯學に資する所あらば、幸である。